

## 「景観まちづくりと英国 CABE」

講師：坂井文氏（北海道大学大学院工学研究院准教授）

日時 2014年5月26日（木）午後7時～8時50分

場所 東京都港区六本木5-12-22（株）環境デザイン研究所 会議室

### 【坂井先生プロフィール】

研究内容：都市計画／ランドスケープ／景観

経歴：横浜国立大学建築学科卒

ハーバード大学デザイン大学院ランドスケープ・アーキテクチャー修士

ロンドン大学 PhD

オックスフォード大学

UCLA 客員研究員

ニューヨーク市立大学客員教授

職歴：JR 東日本

ササキ・アソシエイツ（ボストン）

ビルディング・デザイン・パートナーシップ（ロンドン）

### ■公共投資にともなう都市景観の誘導

「ストックの活用から地区の活性化へ」として、ニューヨークのハインラインとボストンの事例をご紹介します。

ハインラインは文化と歴史をキーワードに、歴史的景観の保全から周辺も都市開発を誘導し成功した事例です。歴史的景観によるまちづくりは日本でも様々に行われていますが、一口に歴史的といっても“戻す時代をどこに置くのか？”が問題で、日本の場合この点のターゲットがあいまいであると坂井先生は指摘されています。

ハインラインの成功のポイントとして3つの要素を上げられました。

① デザインが良い

② 民活が優れている → NPO が主体となり民間のドネーションによって開発

③ 行政がマネージメントに参加 → 建物ガイドラインを設定

特に③について、ガイドラインエリアの景観を守るためにエリア外の民間開発に空中権を移譲する等の方策がとられたことが素晴らしく、このプロセスは是非とも学ぶべきと。

ボストン BIG DIG の事例は高架高速道路の撤去にともなう公共空間の再整備事例です。

老朽化した高架道路の改修コストが莫大になることから、それならいっそ道路を地下にして地上を公園にしてしまえ！という発想で計画されたものです。

公園が中心になると周辺の建物が必ず建て替わることが予め想定し、行政がガイドラインを設定したそうです。周辺の環境を把握して街区を区切り、その中の建物ボリュームのスタディによって景観を定めガイドラインが策定されたそうです。

札幌の札幌駅前通りでも同様の事例があるそうで、地下歩道の 신설にともない地上部を広場として、周辺の建物に対して地区計画を適用するガイドラインが設定されたそうです。

結論として、

「公共投資にともなう都市景観の誘導」では、線状（線状公園、道路、地下道）の公共空間が重要で、建物単体ではなく街並みを見越した建築の景観誘導が大切であり、建築単体の開発の際に周辺の都市開発的誘導につながる事が重要。

## ■民間開発による都市景観の誘導

ここでは英国 CABE の事例をお話いただきました。

きっかけは 1989 年チャールズ皇太子の「開発によって従来の景観が失われてしまう危機感の表明」からで、1999 年政府諮問機関の提言を受けて 2000 年に策定された「都市白書」に「建築家が都市景観を主導すべき」という考えが明記されたそうです。建築関係者には当たり前かもしれないが、都市計画にデザインを持ち込んだ点はイギリスでも新しいことで、これを制度化した点がスゴイと。その都市計画制度の中身の一部、

PPG1（プランニング・ポリシー・ガイダンス）

「良好で望ましいデザイン計画が、全ての開発プロセスにおける目的となるべきである」

PPS1（プランニング・ポリシー・ステイトメント）

「質のいいデザインは質のいい都市計画と不可分」

「スケール、密度、ボリューム、高さ、計画、配置計画やアクセスについて指導し、近隣、さらに広い地域の環境に合わせた開発を行うよう指導する」

イギリスでは 1980 年代後半から地方分権が進んだことによる課題が見えていたそうです。

つまり都市計画制度に基づいて開発許可を行う地方自治体の人材不足、研修不足によって政策と現状との乖離が大きくなりそのためのサポート組織の必要性が顕在化し、そこで登場したのが CABE ということです。

CABE (Commission for Architecture and Built Environment) 建築都市環境委員会

- ・ 1999 年設立
- ・ 都市計画コンサルタント業務を遂行する
- ・ その業務に法的強制力はない
- ・ 財源は文化メディアスポーツ省と運輸自治省
- ・ 前身となる組織は RFAC (Royal Fine Art Commission)

## 第4回 まちづくり NEXT セミナーレポート

CABE の役割は「公共及び民間による開発計画の安全性・景観面・機能性を高めるデザインを導く」ことで以下の業務を行っています。

- ① イネーブル・サービス（計画実現支援）← 公的機関に対する専門的な技術援助
- ② デザイン審査（開発計画のデザイン審査）
- ③ 調査研究 ← ここが大事！シンクタンク機能に力を入れた
- ④ デザイン教育の促進

イネーブル・サービスの公的機関に対して行う専門的な技術援助とは、

- ・事業企画の深度化のための助言（コンペ準備など）
- ・開発や建設に関する専門知識の提供
- ・計画関係者の調整作業への助言
- ・PFI 事業などの公民パートナーシップ事業についての情報提供
- ・モニタリング制度導入に対する助言

と大変多岐に渡りますが、これは CABE という組織が様々な領域の人材を用意しているから可能となるということです。

デザイン審査は、デザイン審査委員会によって年間約 450 件の審査を行っているとのこと。

審査委員は建築家、都市計画家、ランドスケープ、アーバンデザインなど総勢 39 名。

1 件につき 1 時間とし、15 分間の計画説明の後 45 分間質疑応答を行うそうです。

非常に短時間に感じますが、チェアマンが事前に問題点を整理してそれぞれの専門家に振ることで効率化しているそうです。評価についても事前にデザイン評価のポイントを決めておくということです。

ユニークなのは、計画説明にパワーポイントを禁止していること。図面パネルと模型によってのみ説明を許されるそうです。

CABE のイネーブル・サービス、デザイン審査のケーススタディとして、

1. 公共建築の開発計画（リンカーン州立リンカーン博物館）
2. 公共空間の開発計画（ノッティングハム市オールド・マーケット・スクエア）
3. オリンピック会場の整備計画

をご紹介します。

1. ではコンペ後 5 名に絞り 4 ヶ月かけて周辺マスタープランを提出させ、その案を評価して当選者を決定したそうです。その結果無名の若手建築家が選ばれたとのこと。
2. では提案者の受け答えをチェックして評価したそうです。それは、必ず開催される市民参加の説明会に適した人物か？を評価するためだそうです。
3. では計画段階からオリンピック後に周辺をどう開発するか？のプランが重要であったこと。そして実際オリンピック後の開発計画を公社が着々と実行していることが理解できました。それだけに、坂井先生にとっては 2020 年東京五輪後がご心配なようです。

## ■公共空間の再整備からの都市再生

公共空間の再整備 → 都市アイデンティティの創造

ということで、ロンドンのトラファルガー・スクエアの事例をご紹介いただきました。ロンドンの観光スポットであるトラファルガー・スクエアは4面を道路に囲まれる利便性の悪い広場でした。同時に市の中心部でもあり非常に交通量の多い場所で、車と歩行者の混在が大きな問題であった場所です。

この解決困難な歩車混在を広場の利便性優先に思い切って切り替えるため、王立美術館側の道路を歩行者専用とし、巨大な擁壁を階段に改修しました。

その結果は言わずもがな・・・、都市の魅力アップに貢献しているようです。

## ■景観まちづくり 田園の場合

田園のまちづくりはむつかしい！と。

市民は都市景観が重要、観光客は田園景観を求める。住民の景観と来客（観光客）の景観。街中は何を基軸にすべきか？地方都市の街の中心部が特にむつかしい。

因みに北海道の場合、土地全体に対する都市計画区域面積はわずか7%で、その7%の中に人口の78%が住んでいるそうです。

坂井先生は、田園は土地利用で景観が変わると言われます。農地など小割りの区画を大きな区画に替えることで一気に風景が変わるとも。

そのまちの立ち位置を考えているか？魅力的か、そうでないか？といった考えが景観にとっては大変重要と。

## ■質疑応答の要点

Q：CABEの元々の組織を改組した際、旧組織の人たちの反対派なかったのか？

A：もともと古い組織だったため改革は必然と受け入れられた。さらにそのメンバーが偉大な建築家集団だったため意識の面でも受け入れられた。

Q：CABEの審査委員の人数は？

A：20名。質問する専門家が10名、残る10名は当該自治体の人。

Q：CABEのデザイン審査は事業者には規制とを感じるがメリットはあるのか？

A：事業者は従来の開発許可に時間がかかることが難点だったがデザイン審査によってその時間が短縮できるメリットが生まれた。

#### 第4回 まちづくり NEXT セミナーレポート

Q：PPG は景観だけではなく、まちの活性化にも当てはまる考え方では？

A：PPG、都市計法など決め事の中でどう促進するかをサポートするのが CABE。

指針は中央政府がつくるが強制力はない。予算人員は政府が賄う。

日本は国交省、公共建築協会や財団が近いと思うがやっけることが違う。

Q：日本にできない理由は？

A：開発許可制度の違い。地方分権に向かうので背景は同じはず。既存の組織を改革して機能させることができるか？

Q：田園では景観、環境、デザイン、商品までトータルに計画し成功している事例がある。

農業＋観光＋景観をセットにした考え方が必要。

A：つなぐ人、デザインする人が大事。量ではなく質の高い価値あるコンサルが重要。

Q：宮崎市もまちの景観への取り組み中ではあるが、縦横社会で難しい。介護の領域に都市計画法が障害になるケースも発生する。

トラファルガー・スクエアの歩行者専用道路の影響を受けた車はどこに行った？

A：切り替えに 30 年間交通課が許可しなかった。行政は日本もイギリスも同じ。

イギリスは人口減少が始まり交通量も減少している。都市のアイデンティティを考えるには、従来の価値観ではなく新しい価値観で議論すると展望が開ける。

以上